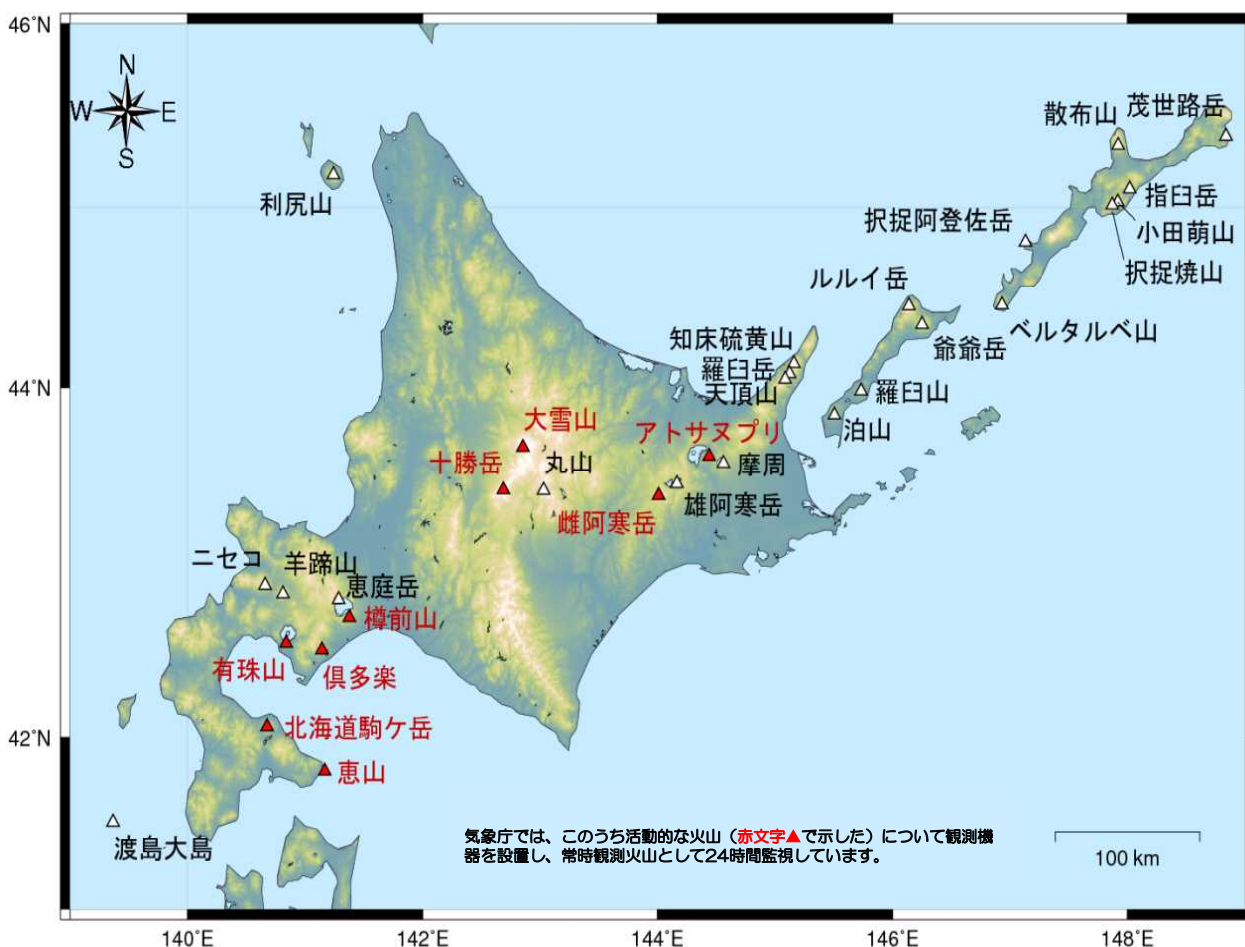


北海道の活火山

北海道には、現在31の活火山(北方領土の11火山を含む)があります。

このうち、雌阿寒岳、十勝岳、樽前山、有珠山、北海道駒ヶ岳、アトサヌプリ、大雪山、倶多楽、恵山の9つの活動的な火山について、過去の噴火活動の履歴や現在の活動状況などについて紹介します。

札幌管区気象台では、これらの9火山について観測機器を設置し、常時観測火山として24時間体制で火山活動を監視しています。



【活火山とは、「過去およそ1万年以内に噴火した火山及び現在活発な噴気活動のある火山」をいいます。】

札幌管区気象台では、火山災害の軽減のため活火山を対象に噴火警報及び噴火予報を発表しています。

(詳しいことは下記の札幌管区気象台HPをご覧ください)

地図の作成にあたっては、「国土数値情報(湖沼データ)国土交通省」及びGTOPO(米国USGS)を使用しています。



気象庁

Japan Meteorological Agency

札幌管区気象台 火山監視・情報センター

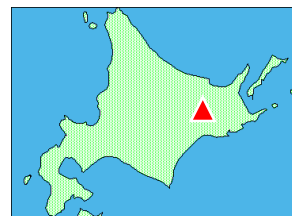
Tel : 011-611-2421

<http://www.jma-net.go.jp/sapporo/>

「製作：2014年(平成27年)9月」

雌阿寒岳

Meakandake(1499m)



阿寒カルデラの南西部に位置し、数万年前から活動を開始した火山で、8個の小型火山体が集まってできています。周辺には阿寒湖やオンネトーがあり、針葉樹の深い森に囲まれた自然豊かなところ です。

歴史時代の噴火は小規模なものばかりですが、1万2千年前には爆発的な噴火が頻発し、火砕流が現在の阿寒湖畔近くまで達するなど、400年ほど前までは規模の大きな噴火を繰り返しました。最近では2008年11月にごく小さな噴火が発生しています。

雌阿寒岳の歴史の中で記録に残る噴火は1955年から始まります。

1955～1966年、1988年、1996年、1998年、2006年、そして2008年に発生し周辺に少量の火山灰を降らせるごく小さな噴火を繰り返しています。



2008年(平成20年)11月28日
南東上空からみた雌阿寒岳の噴煙

2008年11月18日及び28日～29日にかけて、ポンマチネシリ96-1火口及び同第4火口で、ごく小さな噴火が発生しました。

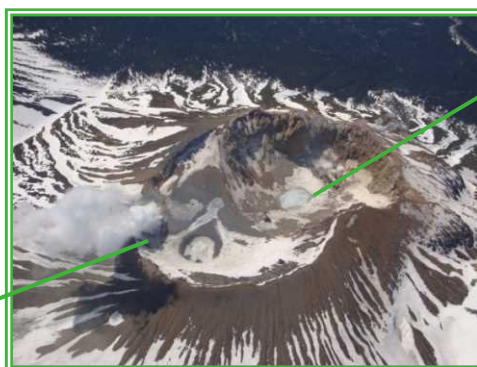
火山灰は、18日の噴火では火口の南東側数百mの範囲に、28日～29日の噴火では火口周辺の全方向に広がり、東側では約8km、北側では約6kmの範囲に降りました。

これらの噴火による噴出物量は約12,000トンと推定されています。

現在の雌阿寒岳は、火山性地震が時折増えることがあり、また、火口からは活発な噴気が見られます。

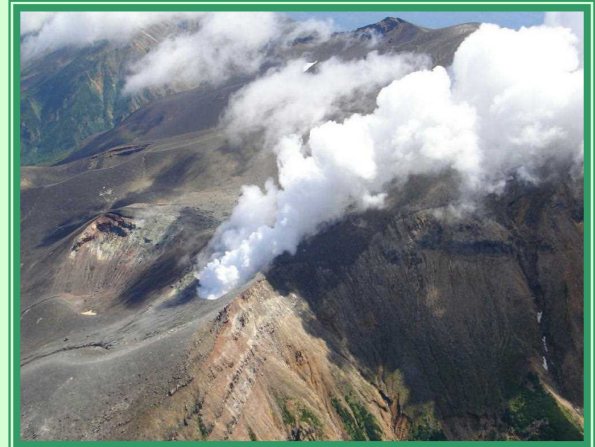
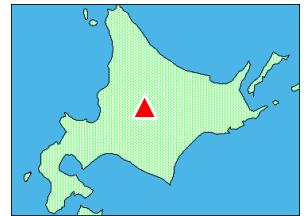


ポンマチネシリ96-1火口



ポンマチネシリ赤沼火口

十勝岳 Tokachidake(2077m)



十勝岳は、北海道の中央部に南北約50kmにわたって形成されている大雪—十勝火山列の南西端に位置し、山頂部の大正火口、62—2火口では噴気活動が活発です。写真撮影スポットとして有名な「美瑛の丘」は約150万～120万年前の噴火で噴出した火砕流が作った丘陵地帯です。

歴史時代には、安政(1857年)、明治(1887年)、大正(1926年)、昭和および平成(1962年、1988～1989年)に噴火記録があります。このうち1926年の大正噴火では火山泥流により144名が、1962年の噴火では大きな噴石によって火口の近くにいた5名が犠牲になりました。

1926年、まだ山頂に積雪が残る5月、十勝岳はマグマ水蒸気噴火を起こし、熱い岩屑なだれが山体の斜面の雪を急速に融かし、大規模な火山泥流が発生しました。火山泥流は、美瑛川と富良野川を流れ下り、わずかな時間で富良野原野を埋め尽くしました。この泥流により144名が犠牲となりました。



1926年の噴火から約36年後の1962年6月、噴煙を約12,000mまで立ち上げる大規模な噴火が発生しました。この噴火によって舞い上がった火山灰は遠く千島列島まで達し、また、北海道の東部の地域では火山灰の他、火山ガスの影響で一時避難した町もありました。この噴火は十勝岳の歴史時代の中で最も大きく、また、新しい火口(62火口群)も作られました。

1962年(昭和37年)6月30日
美瑛町役場から見た十勝岳の噴煙

1988年12月には、1962年の噴火で作られた62—2火口から、小規模な火砕流と火砕サージを伴う噴火が発生しました。この噴火では幸いにして人的被害はありませんでした。しかし、翌年の3月まで断続的に噴火が繰り返され、積雪時期で泥流の危険性もあったため、一部の地域では長期間の避難生活を余儀なくされました。

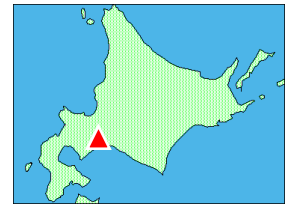
この噴火の直前に、地域では火山災害の軽減防止のため火山ハザードマップが作られ、減災に向けて取り組みが行われていました。



1988年(昭和63年)12月25日
美瑛町白金温泉から見た十勝岳の噴火

樽前山

Tarumaesan(1041m)



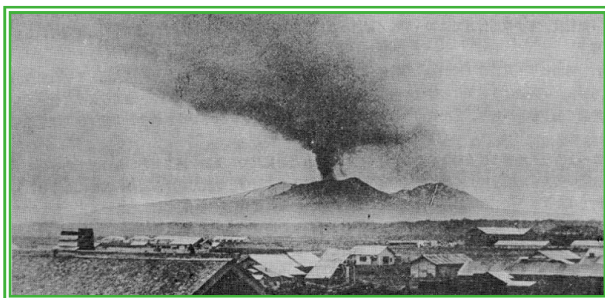
支笏カルデラの南東壁に生じた火山で、山頂部には直径約1.5kmの外輪山があり、その中央には火口を埋めつくす溶岩ドームが見られます。

過去に大量の軽石や火山灰を空中高く噴出する大規模な噴火があり、これにより樽前山の東方には多量の火山灰が堆積されています。

山頂部の溶岩ドームは1909年(明治42年)の噴火で形成されたもので、現在もドームやその周辺で活発な噴気活動が見られます。

また、樽前山の北北西には風不死岳が隣接しています。最後の噴火は、約4千5百年前の水蒸噴火と考えられています。

1667年、噴煙を10,000m以上立ち上げる大規模な噴火が起こり、火砕流は山腹の森林を焼き払い、また、立ち上がった噴煙は偏西風により東へ流れ、降下軽石や火山灰が苫小牧市の北部に2mほど堆積しました。それから約70年後の1739年、樽前山の山頂から再び大規模な噴火が起こり、火砕流が山腹を流れ下り、立ち上がった噴煙は東方へ流れ、降下軽石や火山灰が千歳方面に1mほど堆積しました。樽前山は、この2度にわたる大規模な噴火で山頂部に大きな火口が形成されました。



1909年、山頂火口で溶岩ドームを形成する噴火が発生しました。この溶岩ドームは高さ134mで約2日以内に出来たことが知られています。その後の活動は、溶岩ドーム及びその周辺での小規模な噴火に限られます。

1909年(明治42年)4月15日
苫小牧から見た樽前山の噴煙(大井上撮影)
<「樽前山-北海道火山防災会議」から抜粋>



火口原内の溶岩ドームとA火口

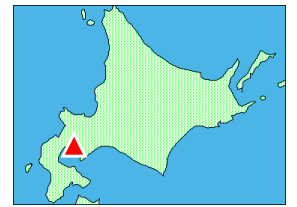


A火口

樽前山は、1978~1981年の小噴火を最後に噴火は発生していませんが、溶岩ドームやその周辺では活発な噴気活動が見られ、また、噴気温度が600°Cを超える火口もあるなど、活動は決して衰えていない火山です。

有珠山

Usuzan(733m 大有珠)



有珠山と昭和新山



昭和新山

約11万年前の巨大噴火により形成された洞爺カルデラ(洞爺湖)の南縁に生じた火山で、約2万年前から噴火活動を続けています。

噴火の最盛期は約1万年前で、8千～7千年前に山体の大崩壊を起こした後に数千年間の休止期があり、1663年に噴火を再開してからは30～50年の周期で9回の噴火が発生しています。最近の噴火は2000年に発生しました。

1663年以降の9回の噴火は、山頂で6回、その他の3回は山麓で発生しています。山麓の噴火では1910年(明治43年)の活動で明治新山が、1943～1945年(昭和18～20年)の活動では昭和山が作られています。明治新山が作られた1910年の活動は、地震の増加をもって噴火の前に住民の避難がなされた、世界で最初の噴火予知に成功した例となっています。



2000年(平成12年)3月31日
西山西麓から噴火した有珠山の様子

同様に、2000年3月31日の噴火でも、住民が事前に避難し人的被害がありませんでした。

この噴火の前には、4日前の3月27日に身体に感じない微小地震が徐々に増加しはじめ、翌28日には有感地震が発生し、噴火の直前には山頂部や北西山麓に断層や地割れが確認されました。最初の噴火は西山西麓から発生し、新たな火口から火山灰を含む噴煙が3,500mまで上がり、周辺に噴石が飛散しました。翌4月1日、金比羅山でも火口が出現し噴火が発生しました。一連の噴火活動は次第に低下し、2001年9月までに停止しました。



2005年(平成17年)5月11日
有珠山山頂火口原の噴気の様子



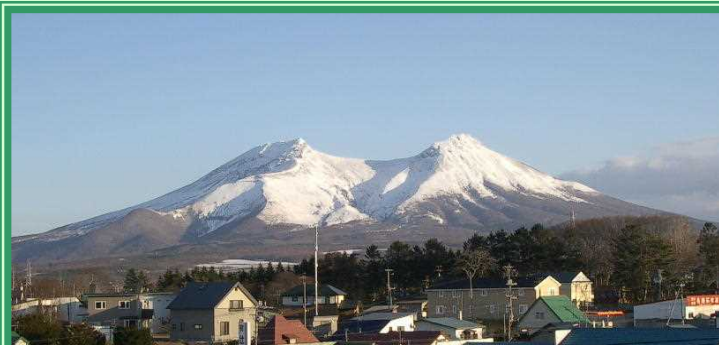
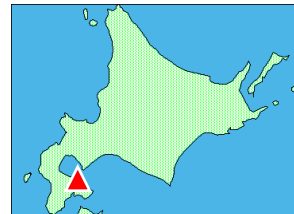
2004年(平成16年)4月22日
西山西麓の噴気の様子

現在の活動は、山頂火口原内や西山西麓の火口から噴気が見られますが静穏な状況です。

過去の噴火を基に、火山災害の軽減防止のため火山ハザードマップが作られ、減災に向け地域住民に配布されています。

北海道駒ヶ岳

Hokkaido-Komagatake(1131m 剣ヶ峯)



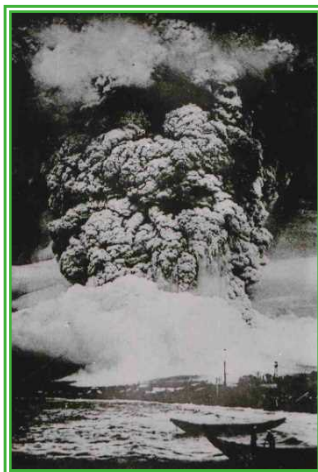
穏やかな噴火湾に面してそびえる北海道駒ヶ岳は、山頂部が大きく失われた円錐形の美しい成層火山です。

駒ヶ岳は数万年にわたる活動の中で、山体崩壊と火砕流をともなう大噴火を繰り返しました。1640年の噴火では崩壊物が噴火湾に流入して津波が発生したほか、川をせきとめて現在の大沼・小沼を形成しました。また、1929年(昭和4年)にも火砕流を伴う大噴火が発生し大きな被害が出ています。

最近の噴火は2000年に発生しましたが、幸い噴火の規模は小さく、大きな被害はありませんでした。

北海道駒ヶ岳は、火砕流を伴い短い時間で大量の軽石や火山灰を激しく噴出する噴火が特徴です。その一つに1929年(昭和4年)の噴火があります。6月17日午前0時過ぎ、小規模な噴火から始まり、次第に勢いを増し、午前11時ころには噴煙が高度約14,000mまで達しました。

午後になって、さらに活動が激しくなり火砕流も流れ下りました。この激しい噴火は午後11時ころには勢いも急速に衰え、翌日(18日)には終息しました。この噴火により2名が犠牲になり、降下軽石や火山灰で多くの家屋や農業、漁業が大きな被害を受けました。



1929年(昭和4年)6月17日噴火
<提供:駒ヶ岳火山防災会議協議会>

最近では1996年、1998年、2000年の火口原内へ噴石を飛散し、山麓に少量の火山灰を噴出する規模の小さな噴火がありました。この噴火で大きな被害はありませんでした。



1998年(平成10年)10月25日噴火
<提供:駒ヶ岳火山防災会議協議会>



駒ヶ岳山頂火口原には1942年の噴火で生じた亀裂が見られる(南側上空から撮影)



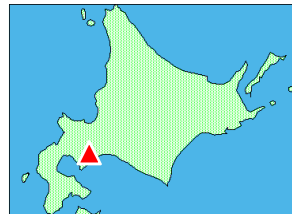
1929年の噴火で生じた火口(昭和4年火口)

2000年の噴火を最後に、北海道駒ヶ岳の活動は静穏に経過しています。

噴火に至る前兆が乏しく予測の難しい活火山です。麓の市町で作る火山防災会議協議会では、住民の行動意識を高めるため、緊急避難場所などを示した防災ハンドブックや防災ポスターを作成・配布し、減災に努めています。

倶多楽

Kuttara(377m 日和山)

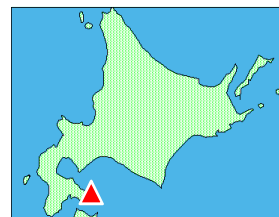


胆振地方中部の支笏洞爺国立公園内に位置する倶多楽火山は、約4万年前までの噴火活動で形成された円形のカルデラと、その西麓にある登別火山（日和山溶岩ドーム、大湯沼・地獄谷などの爆裂火口）を含めた呼び名です。登別温泉は、大湯沼や地獄谷などから豊富な温泉が湧出し、アイヌ語の「ヌプル・ペツ（水の色の濃い川）」が地名の語源となった北海道屈指の温泉地です。

歴史時代に噴火の記録はありませんが、地質調査では最近1万年間に8回の水蒸気噴火が起きたこと、最新の噴火は約200年前に発生したことがわかっています。

恵山

Esan(618m 恵山)

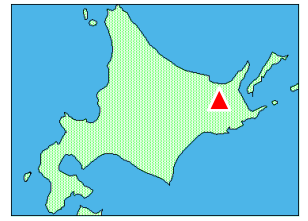


恵山は渡島半島南東端に位置し、約4万～5万年前に活動を開始した小型の活火山で、山頂部の溶岩ドーム西側の爆裂火口では噴気活動が活発です。標高が低いにもかかわらず多様な高山植物やツツジ類が群生し、海岸沿いの野趣あふれる温泉などとともに恵山道立自然公園に指定されています。

約8千年前以降大規模な火砕流が発生する噴火活動を繰り返してきましたが、歴史時代の記録としては1846年と1874年に水蒸気噴火が起こり、1846年の噴火では泥流により多数の死者が出ています。

アトサヌプリ

Atosanupuri(508m アトサヌプリ)

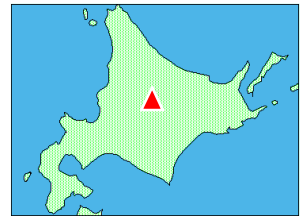


アイヌ語で「裸の山」を意味するアトサヌプリは、北海道東部の屈斜路カルデラの中央部に位置し、現在も活発な噴気活動が続いているアトサヌプリ（硫黄山）、マクワンチサップ、サワンチサップなど溶岩ドーム群の総称です。火山と森と湖の原始的景観に優れた阿寒国立公園内に位置し、川湯温泉などの温泉資源にも恵まれています。

約1.5万年前以降、火砕流の発生や多数の溶岩ドーム形成を伴う噴火活動を繰り返しており、歴史時代に噴火の記録はありませんが、数百年前にはアトサヌプリ溶岩ドームで「熊落し」の爆裂火口を形成する水蒸気噴火が起きたことがわかっています。

大雪山

Taisetsuzan (2291m 旭岳)



大雪山は、北海道中央部の大雪山国立公園内に位置し、北海道の最高峰である旭岳を含む多数の成層火山や溶岩ドームからなる火山の総称です。面積が約23万haにも及ぶ広大な公園内は貴重な動植物の宝庫で、山麓には豊富な温泉も湧き出しています。

過去1万年前以降に噴火したことがはっきりしているのは旭岳のみで、約2千年以上前に山体崩壊によって山頂西側に馬蹄形の地獄谷火口が生じました。この時の岩なだれ堆積物は旭岳温泉にまで達しています。その後約1千年前から水蒸気噴火が頻発し、姿見池火口など小火口群を生じました。歴史時代に噴火の記録はありませんが、地質調査では最新の噴火は約2500年前以降に発生したことがわかっています。